博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	長谷川 隆一
論 文 題 目	後漢思想社会史研究

審査要旨

長谷川氏による本学位請求論文は後漢時代の思想及び背景となる社会を論じたものである。

従来後漢思想史研究は、『白虎通』という後漢固有の儒教が国家のあり方を規定しているのか、それとも理念の産物なのかという問題、「批判の哲学者」的側面に終止する王充研究という問題があった。これに対して本論文では、『白虎通』という正統理念の元に生き、かつ王充ではない後漢諸子である王符・趙岐・荀悦・徐幹を研究の中心に据えた。また、後漢諸子に対する研究は、儒家的・法家的記述に対して如何に解釈を行うのかという点に集中していた。しかし、これは儒教にあらかじめ組み込まれた論理である「権」という発想により氷解してしまう。現在の後漢諸子研究は、『白虎通』を中心とした正統理念の研究に比して、立ち後れている。

こうした問題を踏まえた上で、本論文は、思想家分析の視座に性三品説を用い、それにおける教化の内実を探り、その上で個々の思想家たちがなぜそのように考えたのかという現実的背景の考察を行った。さらに、才性論の文脈において、性才一致から唯才主義登場周辺までについて取り扱い、従来の多くの研究とは異なった形で、後漢中期以降の思想史を描き出した。

また、思想史篇に加えて、本論文では、社会史篇を設け、思想家達個人が抱える構造的背景についても検討を行った。思想史篇・社会史篇の両篇を設けることにより、多角的かつ総体的に後漢という時代を考究することを目指したのが、本論文である。以下、概略を説明したい。

思想史篇　第一章「王充の人間観及び教化の論理における儒生と頌漢」は、王充『論衡』の基底に性三品説があることを確認し、王充が性三品説における下愚以外の人間を善に向かわせる、変化させるものとして、五経を学ぶという「聖教」が上手く機能していたことを解明する。第二章「王符の批判対象と賢人」は、王充『論衡』の検討を踏まえ、王符の人間観の検討に入る前に、王符の現実的批判対象、及び「賢」に対する考え方について考察した。王符『潛夫論』が、外戚である鄧騭の専権に対して、自身を含め、王符が「賢」と信じるものを用いるべきと主張したと説明する。第三章「王符の封侯観」は、王符は後漢国家が定めた儒教経義をまとめた『白虎通』に対して、いかなる態度を取ったかについて、外戚封侯を検討し、受け入れるべきところは受け入れ、受け入れられないところは受け入れない、フラットな立場を取っていたと主張する。第四章「王符における教化の論理と人間観」は、王符の人間観に、性三品説が通底しており、それが『論衡』に見える儒生に近似した、経典を媒介として、孔子を始めとしたいにしえの聖人の教化を受けることにより、自身の未萌の善性を伸ばしていくというものであったことを主張する。第五章「趙岐『孟子章句』に見える人間観」は、趙岐が『孟子章句』を著し、性陽情陰説・性三品説・性三品説に付随する経典学習、さらに趙岐が性才分離の過程に位置づけ得る記述を残したことを確認する。第六章「荀悦の人間観」は、性と才の別離を宣言した曹操の唯才主義を背景に、荀悦が『申鑒』を著し、従来の性三品説（原性三品説）とは異なり、人間を九にわけるという細分化を行い、人間の外側に表れた悪に刑罰を加え消失させ、善悪の萌芽の内、善となり得るものを表出させるために、ほとんどの民（特に下下）の心に教化法令（下愚の場合は法令）を加えていると主張した。第七章「徐幹『中論』に見える人間観」は、建安の七子として高名な徐幹が、才の性に対する優越を述べながらも、実は、彼は才の性に対する優越を主張しながらも、彼が至高とした君子は、性才兼ね備えた人間であったとする。第八章「徐幹の賢人論」は、徐幹が、「名実論」に基づき自分をその君子に比定し、その他（小人）との隔絶性を主張し、性三品説の中人を排除し、上智の枠組みにいる君子のみ今は亡き聖人の教化を受けることができるという構造を述べたと主張する。

氏名　長谷川 隆一

社会史篇　第九章「後漢時代における反乱の平定」は、後漢時代特有の「寛」というイデオロギーを背景とした「恩信」により、異質な「賊集団」を承認するという反乱平定方法が見られたことを明らかにする。第十章「後漢中期以降における宣帝顕彰と寛猛相済」は、後漢諸子たちが、「寛」だけではなく、「寛猛相済」を主張し、宣帝顕彰と絡めて「寛」治に対する批判を行ったとする。第十一章「後漢中期における地方長官と豪族の関係性の一側面」は、「北海相景君碑」の分析により、本論文で取り扱った思想家達が豪族として、思想的著作を著すと同時に、現実に官吏となり栄達を目指す人間たちでもあったことを確認する。第十二章「処士再考」は、王符もそうであった処士という身分が、官職についていないある一定以上の家に生まれた人が付ける一つの称号であったことを主張する。

後漢の思想界は「才」に儒教の徳目に準じる価値を認め、徐々にその有用性を評価していく、と本論文は主張する。王符には法術重視の傾向もあるが、かれが「才」を標榜する最初の事例と本論文は主張している。それが正しいか否かは、まず才の意味や意義をさらに明確に定義して論を進めることが必要であろう。各所に散見される傍証的な説明は、断定する論拠の無さからのものと解されかねない。確証となる資料を挙げるべきだろう。

公開審査会では、このような才を儒教の主要な要素、あるいは性三品説を規定する徳目と考え得るのか。あるいは、魏晋期に展開される才性四本論と本論文との関係を問う質問もあった。それらに対しては、才が儒教の徳目に含まれること、性三品説の展開があって、才性四本論が成立するとの回答を得た。

後漢二百年間に仏教が社会の上層部から漸進的に浸透し、思想界も幅を広げ、老荘の書も読まれ、そして図讖説や災異説も合理的に批判されていく。このような状態の内で、現実社会で諸事を処理する実務能力が求められても、儒教は対応できず、才が重んじられていく。したがって、唯才主義と表現する傾向の台頭を求める本論文の研究方向は妥当である。王符から人為への評価が始まり、それが以後も継承され、思想界の内実も拡充されたと解釈できよう。こうした意味で、本論文は後漢という時代の一端の解明を目指した試みとして、高い評価を与えられるものと言えよう。

したがって、本審査会は、全員一致で、長谷川隆一氏の博士学位請求論文が学位を授与するに相応しい論文であると認めるものである。

公開審査会開催日	2022年　5月　24日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学・教授	渡邉　義浩	「古典中国」学	文学博士（筑波大学）
審査委員	早稲田大学・教授	垣内　景子	中国哲学	博士（文学）（早稲田大学）
審査委員	日本大学・元教授	田中　麻紗巳	中国哲学	
審査委員				
審査委員				